岡山中学生白書

2018年を生きる中学生は何を感じているのか

特定非営利活動法人だっぴ

はじめに

本書を発行した特定非営利活動法人だっぴは、
一人一人の若者が　人とのつながりの中で　自分らしく生きられる社会
を目指し、若者を対象とした機会づくりを岡山県中心に行っています。

私たちは2015年より中学校と連携し、中学生が地域の大人や大学生と交流する機会をつくってきました。これまで約1400人の中学生に機会を提供し、自己肯定感や周囲への関心についてのアンケートを参加前後で行いました。参加した中学生には、自己肯定感や自己効力感の向上が見られ、地域への愛着も増加するという変化が見られます。その一方で、参加前のアンケートを見ると、今の**中学生たちの自己肯定感の低さや、地域への愛着の低さ**が見て取れました。

アンケートから見えてくる中学生の現状を地域のみなさまに還元し、今の中学生の状況を正しく発信することも自分たちの役割ではないかと考え、この中学生白書を発行することと致しました。教育関係者のみならず、多くの方に中学生の置かれた状況の一端を知っていただき、これからの子ども達への関わりを考える機会となることを願っています。

代表理事　柏原拓史

白書発行の目的・ねらい

白書発行のねらい

岡山における中学生の声、気持ちを偏りなく発信すること
地域の教育施策をより良いものにしていくこと

本書で明らかにしたいこと
岡山県の中学生における
①自己肯定感・自己効力感の現状について
②地域への関心や愛着度について
③社会性（役に立ちたい気持ち）について

子どもを取り巻く状況
〇自己肯定感の低い子ども達
これからの社会を子ども達が豊かに生き、地域社会を作る主役として活躍するためには、それぞれの自己肯定感を高めることが必要だと思われます。しかしながら日本の子どもたちは、過去の様々な調査から"自己肯定感が低い"という問題が指摘されており、岡山においてもその状況は大きな違いがありません。

〇地域で子どもが育つ社会環境へ
新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びが必要とされ、国の専門会議の最新提言でも、若者の自己肯定感を高める施策を、行政が地域と協働しながら行う必要性を指摘しています。

このような背景の中、中学生の感じていることや状況を広く知っていただくことが、子ども達を見守り育む社会の醸成につながると考えました。本書では、NPO法人だっぴが実施する「中学生だっぴ」の参加前後で、中学生が回答したアンケートの結果から読み取れることを中心に、できるだけ客観的に考察することに留意して作成しました。

中学生だっぴとは

私たちがメイン事業として、学校や自治体と協働で実施しているキャリア教育プログラムです。
中学生を対象に「中学生×大学生×地域の大人」の多世代交流を授業の中で行なっています。

だっぴのルール
✔フラットな関係
年齢や肩書きは置いておいて、ひとりの人同士として尊重しあおう
✔ちがいからの発見を楽しむ
考え方や経験の違いから学び合おう
正解不正解を決める場ではないので、まずは受け止めてみよう

中学生4人・大学生が2人・大人が2人の計8人程度のグループをつくり、
働き方や生き方などについて、出題されたテーマに沿って自由に話し合います。
各グループに会話のサポート役としてだっぴキャスト(大学生)が入ります。

＜テーマ例＞
・明日、地球が滅びるなら何する？
・人と関わるとき大切にしたいこと
・勉強する意味って？
・やさしい人ってどんな人？
・どんな大人になりたい？

プログラムの流れ

1、アイスブレイク
最初は、ジェスチャーゲームなど体を使った簡単なゲームで、
中学生も大人も緊張をほぐします。

2、トークセッション
司会から出されるテーマに対して、自分が思う回答をフリップに書いて、「せーの」で見せ合います。
テーマは、最初は答えやすい、簡単なものから次第に働き方や生き方など深い内容に移っていきます。

3、感想共有
最後は、グループで感想を共有した後、全体でもシェア。
中学生も大学生も、大人も、それぞれが感じたことを伝えます。

アンケートから見る

岡山の中学生の今

中学生だっぴ実施前後で、中学生に回答してもらっているアンケートの参加前アンケートデータを中心に、
岡山の中学生の今を紐解いていきます。参加後のデータも載せていますので、どう変化したのかの参考までにご覧ください。

アンケート調査対象

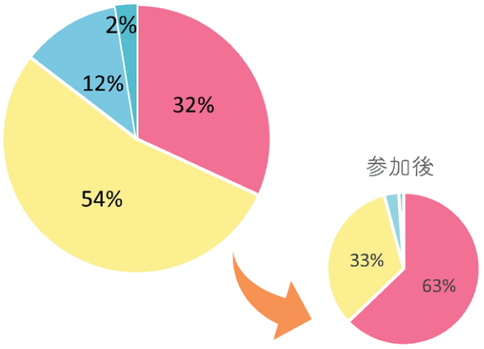
2015年10月23日～2018年2月21日に実施した中学生だっぴの前後アンケートより

対象人数：中学生1～3年生　1277人　　実施回数：岡山県内　12校累計15回

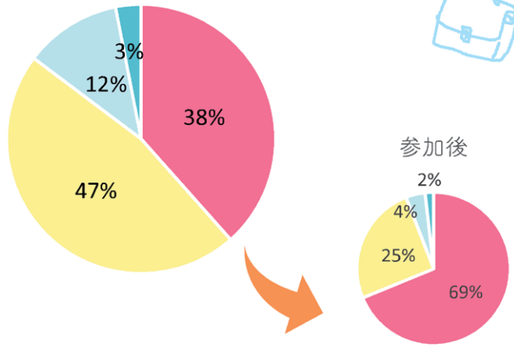
自分自身について

とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　全くそう思わない

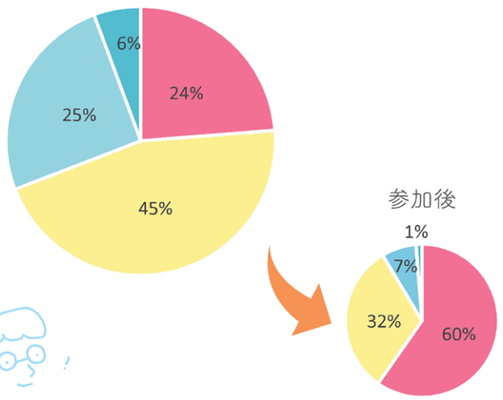
私は自分のことを大切にしようと思う



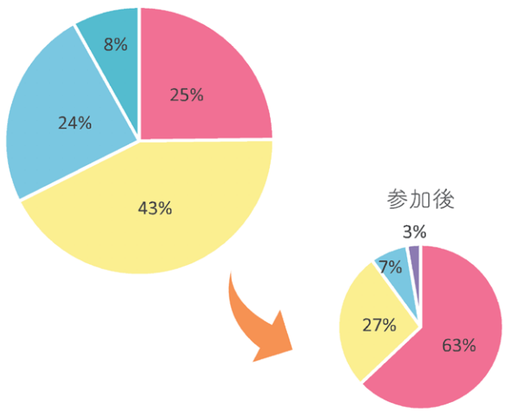
私は多くの人の役に立ちたい



私は、積極的に人と関わっていきたい



私は、たくさんの人の話を聞きたい



「人の役に立ちたい。でも人と関わるのは苦手」

“多くの人の役に立ちたい(右上)”の項目に、「とてもそう思う」と回答した中学生は38％。その一方“積極的に人と関わりたい(左下)”、“たくさんの人の話を聞きたい(右下)”と強く考える中学生は24～25％となっています。「まあそう思う」の回答者を含めても、人の役に立ちたい気持ちを持つ85％に対して、“積極的に人と関わりたい”69％、“たくさんの人の話を聞きたい”68％と、やや低い数値になっています。人に対する貢献意識はあるものの、人と関わることにはやや消極的な気持ちが見て取れます。

参加後の結果について

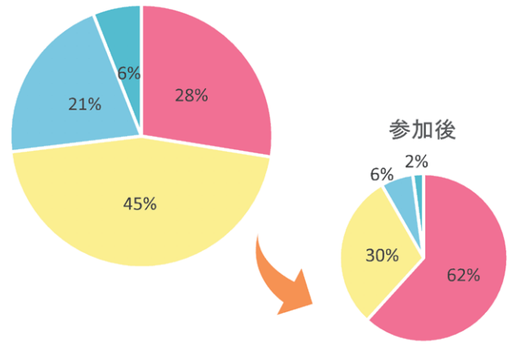
4つの項目全てにおいて、「とてもそう思う」と回答した割合が60%代へ変化しています。学校や家庭以外でのつながりを持ちにくい環境では、初対面の人と話をする場面や、普段の生活圏にはいない人と出会う機会があまりなく、“話す機会が少ない≒コミュニケーションへの自信がない”という関連が想定されます。

変化を見てみると、だっぴのような場で初対面かつ普段会わない人と関わる機会があることで、“人と話すのは苦手な自分”という自己イメージが、“話せる自分”というイメージに変化するきっかけになっているのかもしれません。

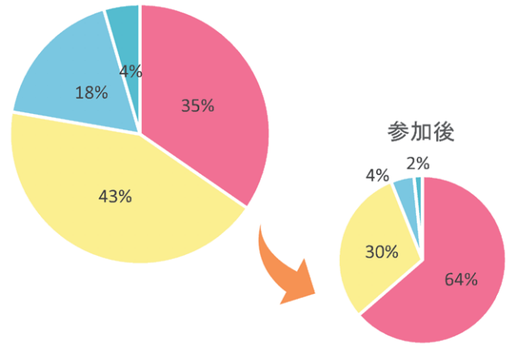
自分の将来について

とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　全くそう思わない

大人になるのが楽しみだ または、働くことが楽しみだ



自分の未来は自分で動けば変えられると思う



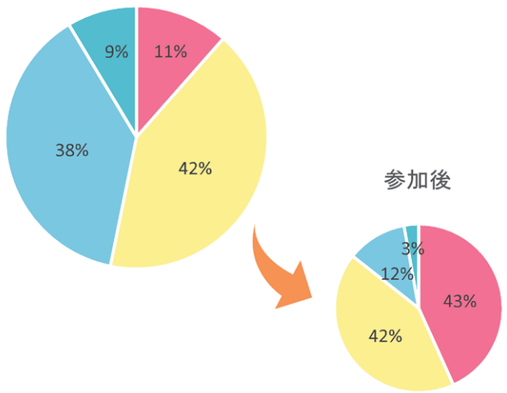
「不安もあるけど、将来はなんとなく楽しみ」

大人になることについて、全体の3/4程度の中学生が肯定的に捉えています。(左図)また、自分の未来は自分で動けば変えられると考えている中学生も全体の3/4以上いることが分かります。(右図)どちらの項目も「まあそう思う」という回答が多いため、明確というよりは、漠然と肯定的な気持ちをもっている子どもが多いことが考えられます。

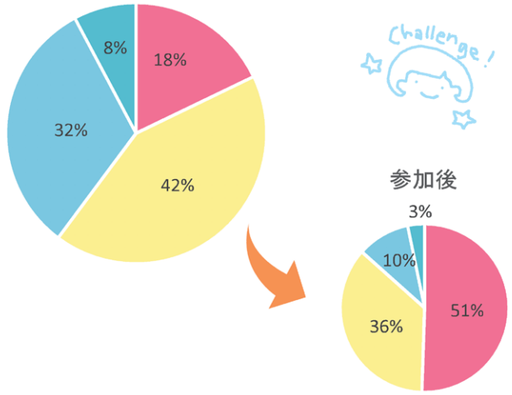
自分の行動について

とてもそう思う　まあそう思う　あまりそう思わない　全くそう思わない

自分の行動により、自分の周囲の状況を少し変えられるかもしれない



日常の過ごし方を変えようと思っている



「自分で状況は変えられない」

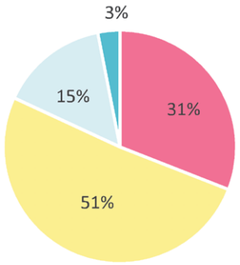
自分の将来については3/4程度の中学生が肯定的な回答をしているのに対し、「自分の行動により周囲の状況を変えられない」と感じている中学生は約半数の47％でした。(左図)

また、同項目にて「とてもそう思う」と回答した中学生は11％しかいません。“日常の過ごし方を変えようと思っている”(右図)の項目もほぼ同様の傾向となっており、実際に行動することが伴う項目については消極的な姿勢が目立ちます。参加後も、両項目とも「とてもそう思う」と回答した中学生は、他の項目よりやや少ない50%程に留まりました。気持ちや思いでは前向きに考えることができても、実際行動をすることについては、ややハードルがあることが推測されます。

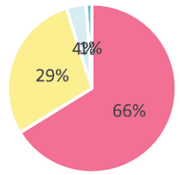
進路選択について

■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

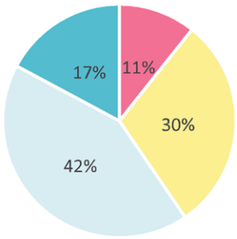
より納得した進路選択(生き方)をするために
できることに取り組んでみたいと思う



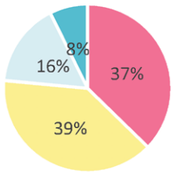
参加後



両親や先生以外の大人の人に
進路選択について相談したいと思う



参加後



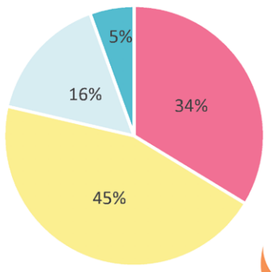
「いろんな人と話せて楽しかった」「経験談を聞けた。自分の将来の役に立ちそう」

8割以上の中学生が「進路選択のためにできることに取り組もう」と考えています。一方で、その相談相手として、両親や先生以外の人を想定している中学生（「とてもそう思う」回答者）は、わずか11％と少なく、だっぴ実施後は37%まで増加しています。異年齢の関わりが希薄化していることから、相談相手の選択肢が限定されてしまいがちなことが推察されますが、実際に関わりをもつ機会をつくることで、相談相手の選択肢が豊富になり、視野も広がっていくのかもしれません。

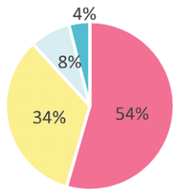
自分の地域について

■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

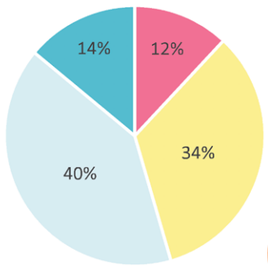
私は、私の住んでいる地域(市町村)が好きだ



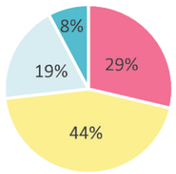
参加後



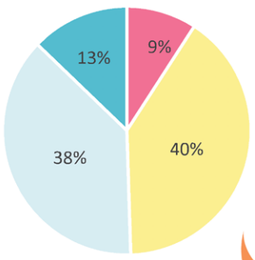
地域で起こっている問題や出来事に関心がある



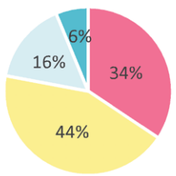
参加後



地域をよりよくするために、
何をすべきか考えたいと思う



参加後



「地域は好きだけど、私の問題ではない」

自分が住んでいる地域を好きだと感じている（「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答）中学生は約8割ですが、他２項目（問題意識、貢献意識）については、中学生の5割程度が消極的な回答となっています。地域への愛着はありつつ、興味関心や当事者意識を強く抱く中学生は多くはないようです。

様々な角度でのデータ比較

これまで見てきた全体のデータをいくつかの類型に分けて比較してみました。

2015年から2017年までに実施した中学生だっぴより

◇岡山市での実施した9回と岡山市以外での5回の参加者をそれぞれ集計

※1 1学年200人以上の中学校での実施（通算2回）を大規模校として類型

※2「私は自分の将来に希望を持てる」については、大規模校は1回のみ集計

◇実施学年別の集計は、1年生1回、2年生8回、3年生3回分の参加者を集計

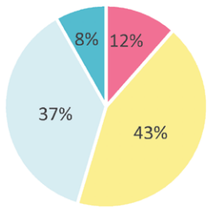
※3 学年関係なく参加した回については除外

開催地域別の比較

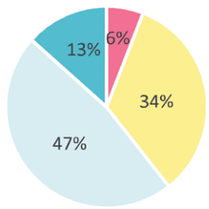
■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

私は自分の将来に希望を持てる

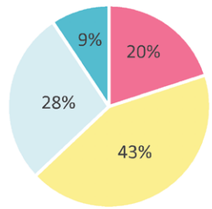
岡山市



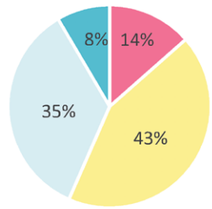
大規模校（1学年200人以上）



岡山市以外



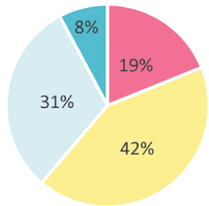
全体



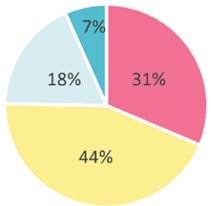
岡山市と岡山市以外での開催を比較すると、岡山市の方が将来に希望をもっている中学生が少ないことが分かります。
ただし、岡山市の中でも、とりわけ大規模校の場合は「とてもそう思う」と回答した中学生が6％と、都市部ほど希望を持ちにくい傾向があることが考えられます。

私は、私の住んでいる地域(市町村)が好きだ

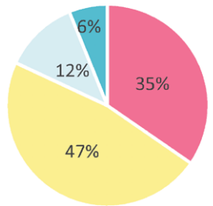
岡山市



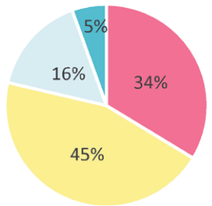
大規模校（1学年200人以上）



岡山市以外



全体



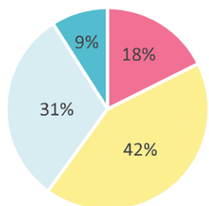
自分の住んでいる地域に愛着を持つ割合も、岡山市よりも岡山市以外の地域が高くなっています。否定的な回答に着目すると、他地域が25%以下の結果に対し、岡山市は39%が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答しています。

学年別の比較

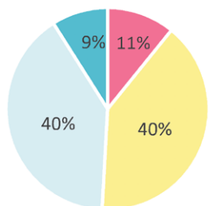
■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない

自分の行動により、自分の周囲の状況を少し変えられるかもしれない

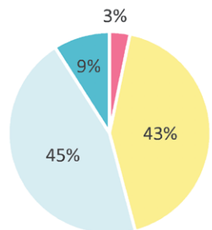
1年生



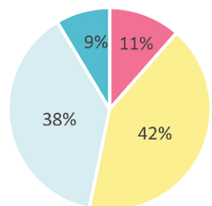
2年生



3年生



全体



参加後の意識変化

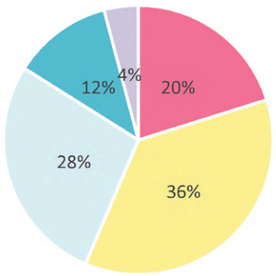
だっぴ参加前のアンケートで「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生の割合が多い２項目を抽出。参加前「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と答えた中学生が、参加後にはどう回答したのか。
以下にその変化と考察をまとめました。

※2017年度に実施した9校の中学生だっぴのデータを使用

両親や先生以外の大人の人に進路選択について相談したいと思う

だっぴ参加前に「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生 **367人**

参加後

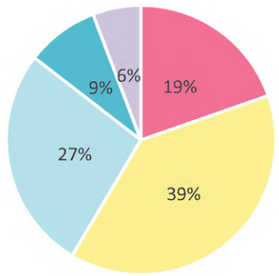


■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない　■無効

自分の行動により、自分の周囲の状況を少し変えられるかもしれない

だっぴ参加前に「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生 **275人**

参加後



■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない　■無効

きっかけがあれば、子ども達は成長していく

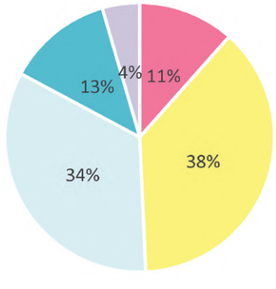
左図：この項目では"親と先生以外の大人との関係性"が垣間見えます。参加前には367人の中学生が否定的な回答をしていましたが、参加後には6割近くが肯定的な回答に変化しています。新しい出会いによる関係性の構築が、心の変化を促したと考えられます。

右図："自分の行動により、自分の周囲の状況を少し変えられるかもしれない"という、自己効力感に関する項目です。275人の否定的な回答者層のうち、6割近くが肯定的な回答に変化しています。

地域で起こっている問題や出来事に関心がある

だっぴ参加前に「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答した中学生 **268人**

参加後



■とてもそう思う　■まあそう思う　■あまりそう思わない　■全くそう思わない　■無効

人との出会いが、地域を"ジブンゴト"にする

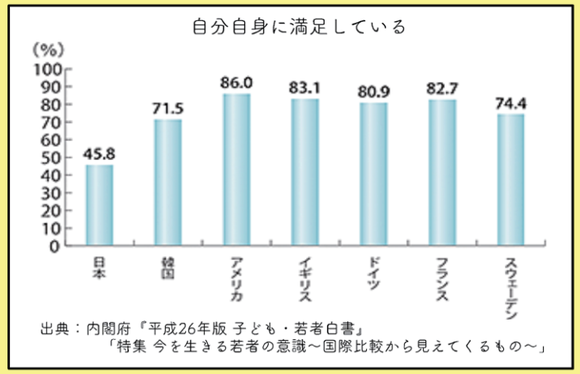
この項目については、268人の否定的回答者層のおよそ半数が肯定的な回答に変化しています。自分の地域の大人と触れ合い、その人物像を把握できたことで、地域を"ジブンゴト"として捉え、当事者意識や安心感が生まれたのではないかと考えられます。

データから読み解く中学生の今

今回、だっぴプログラムで使用しているアンケートを用いながら、岡山の中学生の傾向をまとめてきました。その全体像を振り返る前に、まずは日本全体の傾向について少し触れておきたいと思います。

半数が"自分に満足していない"日本

『平成26年度版子ども・若者白書』(右図)によると、「自分自身に満足している」日本の若者は半数以下であり、海外と比較して圧倒的に低い数値であることが明らかになりました。このニュースの浸透は、日本の若者の自己肯定感の低下を、若者をめぐる問題提起に拍車をかけたように思います。



出典：内閣府『平成26年版 子ども・若者白書』「特集 今を生きる若者の意識～国際比較から見えてくるもの～」

関わりの中で育っていく子ども達

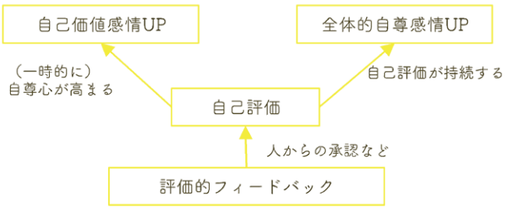
①自分を認められる機会が少ない

岡山の中学生で"自分を大切にしたい"と思っている中学生は86％（P.3参照）と、自己を肯定したいという気持ちが比較的高い結果が見えました。その一方で、"自ら行動すること"に対する意欲をもつ割合は低いようです。

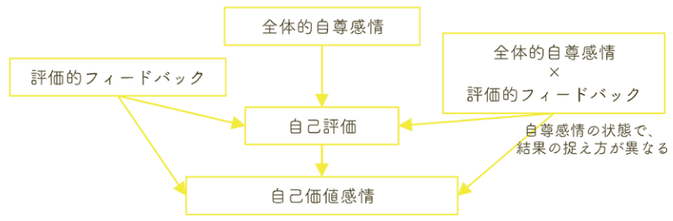
自尊感情は、成功や失敗・人からの承認など（評価的フィードバック）により育まれると言われています。（左図）一方で、自尊感情が高いからこそ、起きた結果に対して自分自身でポジティブに捉えることができるとも考えられています。（右図）下図の認知モデルに基づけば、体験を通して人からの承認など（評価的フィードバック）を得ることで、自尊感情を高めることができます。逆説的ですが、「自信がないから行動には移せない」という状況では、人からの承認を受ける機会が少なく、自尊感情を高めるきっかけがそもそも失われていると言えなくもありません。

行動には移せないという今回のアンケートの傾向から、「自分を認めてくれる機会は少ない」と感じている中学生の存在が推測されるのではないでしょうか。

認知モデル
何らかの評価的フィードバックが、自尊感情に影響を与える考え方



感情モデル
自尊感情の状態そのものが、自己評価に影響を与える考え方



参考：中間玲子『自尊感情の心理学: 理解を深める「取扱説明書」』 2016，金子書房

※ブラウン&マーシャルが提唱する自尊感情のモデルより作成

②限定的な関係の中でおくる日常

進路選択と地域についての項目より（P.5参照）、「自分の住んでいる地域が嫌いというわけではないけれど、積極的に関心を持とうとは思っていない」中学生が多いと考えられます。

また"両親や先生以外の大人の人に進路選択について相談したいと思う"の項目にみられるように、家庭と学校以外でのつながりが深いとはいえません。

こうした**人との信頼関係構築が限定的な範囲になっている状態は、社会との繋がりを感じにくくし、地域に対する当事者意識が育ちにくい**要因の1つとなっているのではないでしょうか。

また、"たくさんの人の話を聞きたい"と思っていても（P.3参照）、中学生が多様な人と出会える機会や安心して話ができる機会は少ないため、そうした機会を創出していく必要があるのではないでしょうか。

③人の役に立ちたい気持ちは上昇

「多くの人の役に立ちたい」と考えている中学生は85％(P.3参照)と、他者への貢献意識を持つ中学生の割合が高いことが分かりました。また全国の小中高生を対象とした『平成27年度版子ども・若者白書』でも、"人の役に立つ人間になりたい"という項目に「そう思う」と肯定的な回答をした割合は、平成18年の92.1％から97.5％と5.4ポイント上昇しています。

「役に立ちたい」という気持ちを持ちながら、限られた関係性や情報の中で"誰のために何をしたいのか"という目的を見つけなくてはならない。こうした気持ちを形にするには、具体的な対象や行動できる自信がないために、何もできず終わってしまうこともあります。実際に行動する機会があり"誰かの役に立ったという経験"などを通して中学生が「自分や自分の行動への自信」を身につけたり、「自分は何をしたいのか」という目的意識を見つけていく過程をサポートしていくことが私たち大人に求められます。

地域での多世代交流が及ぼす効果の考察

中学生×大学生×地域の大人

柏原 拓史
特定非営利活動法人だっぴ 代表理事
1978年岡山市生まれ。名古屋大学大学院理学研究科修了。
若者が多様な生き方を選べる社会の実現へに向けて、2010年特定非営利活動法人だっぴを設立。若者と大人たちが語り合う機会を生み出している。

交流に携わる中で感じた、ふたつの変化

◇参加者の自己肯定感と自己効力感

先のページの分析にあるように、中学生が多様な人々と交流することは、中学生自身の気持ちに大きな変化を生みだします。それらは、自分への自信や自分を大切にする自己肯定感であり、また行動に移すことに繋がる自己効力感でもありました。

学校教員の方々から「あの子のあんな顔初めて見た」という感想を度々いただきます。今回見られた変化は、関係性がある日常の学校や家庭を飛び越えて、"ひとりの人同士"として対等な関係かつ、自分と違う日常を生きる多様な人と出会う時間だからこそ、生まれた効果なのではないでしょうか。

◇関係性の再構築

①子どもと大人

大人にとって"中学生"は、年齢の差や育つ環境の違いから理解や共感をしづらいこともあります。しかし、交流後は参加した大人から「しっかりしていてびっくりした」「未来は大丈夫だと思った」との感想が多々みられます。地域の中学生と直に接し、お互いの考えや人となりに触れることで、大人の子ども達への見る目が変わっていきました。また中学生にとって「大人が自分の話を聞いてくれた」「真摯に話してくれた」という経験は、子ども達の自信や勇気にもなります。そして、向き合ってくれた相手に信頼や感謝の気持ちを抱くきっかけとなります。

②地域と学校

地域と学校の協働の必要性が再認識されつつありますが、地域の人が近い距離感で子ども達と関わり、学校協力しあえるような関係性が構築されている環境はまだ十分とは言えません。学校側では「地域とよい関係を築きたい」との思いがあり、地域では「子ども達のために何かしたい」との思いを持つ人は少なくない印象です。今回だっぴを実施し、地域の大人が学校に足を運び中学生と交流を行いました。この機会は、地域の人々が中学生や学校への理解を深め、学校が地域の人を知るきっかけとなったようです。地域と学校がよい関係を築くことは、子ども達を取り巻くより良い地域環境に繋がるのではないでしょうか。

これからの社会教育に必要なこと

社会の一員としての自己認識

岡山県では過疎高齢化が問題視され、仕事やコミュニティ、文化継承などにおいて次世代の社会の担い手の育成が喫緊の課題となっています。先述した経験は、社会の中での自分と人の繋がりを感じ、その中の個としての自分を認識すること（共同体感覚）につながります。"社会の一員としての自己認識を持つ"という経験は、これからの社会を担っていく中で重要な経験となります。
地域の子どもと大人が感謝や信頼の心で繋がっていること。人のつながりを感じ、社会や地域の問題を、自分ごとととして考えることのできる若者が増えていくこと。それは健全で持続可能な地域の実現に繋がるのではないかと考えています。

"先に生きる大人とこれからを生きる子ども達のつながり"を、学校また地域と共につくっていくこと

社会における人と人のつながりは、時には煩わしさも伴います。しかし、その煩わしさを排除してきた結果が現代の人のつながりの希薄化であり、様々な社会問題の増加の一因となっています。これからの社会教育には、個々の生涯学習という側面だけではなく、社会における人と人のつながりを作るということが重要になるのではないでしょうか。

私たちは、人のつながりを生む社会教育を、学校教育と連携して広げていきたいと考えています。地域には、これまでの社会を創ってきたきた先人がたくさんおられます。しかし、そのことを子ども達が知る機会は多くありません。

このつながりを作ること自体が社会教育であり、そこに社会教育と学校教育の境界はありません。国も"地域と連携した学校教育"の必要性を指摘し、子ども達の教育機会として地域における多世代交流を増やしていくことが、これから求められてゆきます。
地域の各世代がつながり、その中で子ども達が育ちながら、社会と関わっていくことができるような仕組みがあることは、社会全体の未来に大きな価値を生むと感じています。

だっぴなコラム

現役の先生と白書を読む

今回掲載した中学生だっぴのアンケートデータの考察を深めながら、これからの教育について考えていくべく、岡山市立岡山後楽館高校の室先生にお聞きしました！

森分 志学（写真左）
1990年倉敷市生まれ。
特定非営利活動法人だっぴ事務局長。
岡山大学大学院卒業後、大阪へ。教育系の広告代理店に勤め、高大接続に携わる。
2017年に退職し、岡山にUターン。

室 貴由輝（写真右）
1966年岡山県倉敷市生まれ。
岡山市立岡山後楽館高等学校教頭。
環境教育や地域学を通じて地域と学校を結びつけるとともに、ESDを推進する。2013年より「に携わる。やかげ小中高子ども連（YKG60）」の共同代表を務める。

森分　今回、中学生だっぴ過去3年間のアンケートデータを集計することで、岡山県の中学生の全体像が少しでも明らかなればいいなと思っています。
教職やそれ以外の立場から中高生と長い時間かかわってこられた室先生から見て、気になる箇所ってどこでしょうか？

室　自己肯定感が強いですね。一般的に「日本の若者の自己肯定感は低い」という情報が多いので、少し安心しました。ただ、「大人になるのが・働くのが／楽しみか」については、約25％が「楽しみだとは思っていない」となっているのが気になります。

森分　そうですね。感情はポジティブです。ただ「将来についての行動」となると…行動は可視化されやすいので、他者から見られる自分に自信が持てないのかもしれません。

室　子どもたちの自己肯定感の高さを、将来に対しての喜びや期待感に繋げていきたい。それが、これからの教育課題ですね。

なぜ高学年になるにつれて、自己効力感が低下するのか

森分　次に「自分の行動により、周囲の状況を変えられるかもしれない」の回答です。上の学年になるにつれて「あまりそう思わない」の割合が高くなります。これはどういう傾向なんでしょうか？

室　これは成長とともに、「自分の夢や理想が安易にかなわない」と気付くからでしょうね。例えば、何かの提案を促すと、上の学年ほど「大人受けするもの」を提出します。自由な発想があるのに「できるわけない」と、無難な考えにまとめてくる。そんな子どもたちの行動が、反映されているのかもしれません。

また、小学生の方が地域活動に参加する機会が多いので、当然ほめられたり叱られたり、大人からのフィードバックが多くなります。
中高と上がるにつれ、部活や勉強に忙しくなって地域活動に参加しなくなる。小学生時代に養われた地域活動での自信が、中高で一度遮断されてしまうのかもしれない。想像ですけど、大人からフィードバックされる機会が少ないことが、「自信のなさ」に繋がっている気もします。

都市部ほど捉えづらい地域像

森分　次に「私の住む地域が好きか」というアンケート結果なのですが、地域への意識についてはどう読み取れますか？

室　面白いのは、岡山市中心部より周辺地域の子どもたちのほうが、「好き」の割合が高いことです。中心部は「好き」の割合が低い。

森分　町に対する当事者意識の違いでしょうか。岡山市と言っても市内は広いですよね。

室　一概に言えませんが、中心部の子どもたちは、良くも悪くも地域の特徴を捉えづらいのかもしれません。周辺地域の子どもたちは、町の良いところはもちろん、少子高齢化や人口減少といった社会問題が生活に密着しています。もちろん、中心部でも社会問題は身近にあります。ただ、周辺地域と比べると、情報が多い分、その情報を「見なくてもいい・聞かなくてもいい」状況にあるのかなと。

森分　なるほど。都市部の子どもたちは、どうしたら社会問題を身近に感じてもらえるでしょうか。

室　一つは、子どもが学校と家の往復だけにさせないことです。「社会課題」の事柄に触れる機会がないと、問題は見えてきません。社会と子ども達の接点をつくる仕組みを作っていきたいですね。

正解はひとつじゃない事を知ってほしい

森分　子どもと社会と繋ぐ仕組みは、子どもと大人を繋ぐ仕組みでもありますね。

室　そうです。これまで親と教師との接点を中心に、子どもたちは進路や生き方を決めてきました。でも世の中はすごい速さで大きく変化していて、我々の考える常識が通用しない場面もある。これからの子どもは、学校と自分の家庭の価値観のみに縛られてしまうのは、とても危険です。だから、地域の大人と接点を持つことが、とても大切になってきます。

森分　教育する上で「こんな子どもになってほしい」という展望はありますか？

室　「正解や方法は一つじゃない」そう考えられる人間になってほしいです。困難に対して、回避策や解決策をたくさん見つけてほしい。今までは、子どもに対して「この問題にはこの行動」とパターン化しがちで…我々教育者の指導も然り。たくさんの大人から、様々な価値観や考え方を学べるといいですね。大人は、紆余曲折して今がある。最短ルートが正解ではないことを、受け入れられるようになってほしいです。

森分　学校教育が得意とする「最短ルート」とは違う方法でも、子どもたちを応援したいということですね。では、一体誰が「子どもと大人を繋ぐ」という機会を設けるのか？学校側ができること、地域社会ができること…そのあたりについてはどうお考えですか？

室　今後は学校で学ぶ以外の、様々な価値観や力が子どもたちには必要です。しかし、学校だけでそれを担おうとすると、教員や施設を増やさないと対応できません。さらに、教員だけでは価値観が偏ってしまうので、子どもたちに柔軟に対応できる、地域の方々の協力が不可欠です。学校と家庭、そして地域社会が手を取り合うことが大切だと、共有していきたいですね。

森分　やはり学校外の活動が重要ですね。
最後になりますが、学校としてはどう動いていきたいとお考えでしょうか。

室　教科教育ではない部分の指導も重要になってきます。今までの学びの枠を超える覚悟を、我々も持たなければならない。そして、学校で教えきれない部分を明確にして、それを地域社会で補う仕組みを世の中に作っていきたいです。

地域へ子ども達を手放していくこと

森分　そのような仕組みをつくるために、学校としては具体的にはどうしたら良いと思われますか？

室　学校が、地域へ子どもたちを手放せたらいいですね。もし、「子どもに社会で生き抜く力をつけるのが教育だ」と突き付けられたとして、それをキャパオーバーでも「学校がやるべき」と、教師が使命感だけでやり抜こうしてもとうまくいかない気がします。出来ない部分を手放して、地域社会の方々へ橋渡しするモデルケースを作っていかなければなりません。

森分　教育を、分担する意識が社会全体で持てれば最高ですね。
ただ、それだけではやはり理想論でしかないので、先生のおっしゃるモデルケース、すなわち仕組みづくりが重要になってきます。私たち、だっぴも頑張っていきたいところですね。
室先生、今日はありがとうございました！

室　こちらこそ、ありがとうございました！

岡山中学生白書
2018年を生きる中学生は何を感じているのか

編集発行　特定非営利活動法人だっぴ
代表理事　柏原 拓史

編集　森分 志学
編集・レイアウト　河原 彩花

2018年4月25日 初版第1刷

この白書作成にあたり、たくさんの方々にご協力いただきました。

多くの方々にお力添えいただいたこの白書が
これからの子ども達の未来に寄与できることを願っています。

＊・・Thanks!・・＊
アンケートにご協力いただいた中学生のみなさま
実施に協力いただいた、中学校、担当の先生方
Special thanks　国富由紀さま　室貴由輝さま

本誌の内容を転記またはコピーして使用される場合は、
必ず事前に発行者までご連絡ください。
また、本誌のデータを無断で転用・配布するのはご遠慮ください。

発送希望者は、下記までお問い合わせください。

特定非営利活動法人だっぴ
「ひとり一人の若者が人とのつながりの中で自分らしく生きられる社会」の実現を目指し、
2013年10月16日に設立いたしました。

お問い合わせ
MAIL　dappi@dappi-okayama.com

所在地
岡山県岡山市北区表町1丁目4-64上之町ビル3階 301
HP　http://dappi-okayama.com　　Facebook・twitter・Instagramでも情報発信中！

だっぴホームページ